

米国大統領選を前に 思うこと

三菱商事(株)顧問
元北米三菱商事会社社長

杉 浦 康 之



現在、コロナ禍の対応に迫われ、あまり大きく注目されることのない米国大統領選挙であるが、9月のレイバー・デー（今年は9月7日）が明けるとトランプ、バイデン両候補によるテレビ討論なども始まり選挙戦は本格化する。人種差別に対する抗議行動とも相まった現下の未曾有の危機の中、どちらが選出されるのか興味は尽きない。トランプ大統領が再びAmerica Firstを連呼するかと思うと少々辟易するのは決して筆者だけではないだろう。この標語を最も自分たちのものとして受け止めたのは、中西部ラストベルトを中心とする白人層であり、所謂グローバリゼーションの流れに取り残されてしまった人たちだ。トランプ大統領の岩盤支持層と言われている人たちでもある。それでは、彼らは何故取り残されてしまったのだろうか。そこには弱者に対して非常に冷めた見方をする米国政治の一面があるのではないか。選挙戦を前に少し歴史を紐解きながら、そのことを考えてみたい。またそのことがコロナ後の世界に何か示唆を与えるであろうか。

時はジョン・F・ケネディ大統領（在職1961～63年）の時期まで遡る。当時は冷戦の最中である。ソ連との戦いに打ち勝つためには同盟国を含む西側陣営を経済的に強くしなければならない。そのためケネディは、安全保障の観点から、米国の市場を開放し、米国が世界の輸出品の吸収